

日本細菌学会 2019 年第 2 回理事会議事録

- 日 時：2019 年 4 月 22 日（月） 11：00～14：00
- 会 場：札幌コンベンションセンター1 階・ 105 会議室
- 出席者：赤池孝章 理事長、
大西 真、川原一芳、河村好章、菊池 賢、小松澤 均、高井伸二、寺尾 豊、富田治芳、
中川一路、中根明夫、長宗秀明、堀口安彦、松下 治、山口博之 各理事
川端重忠 監事
荒川宜親 評議員会議長／第 93 回総会長、山崎伸二 評議員会副議長
- 欠席者：西川喜代孝、林 哲也 各理事
西川禎一 監事

※五十音順 敬称略

I. 開会（理事長挨拶）

赤池理事長より以下の挨拶があった。今回の学術集会は、開催地札幌の天候が降雪などによる交通機関の乱れの心配がより少なくなることを期待し、通例の 3 月開催とは異なり、4 月下旬の開催となっている。それに伴い理事会、評議員会、会務総会もそれに合わせての開催となっている。年度始めということもあり、教育機関での講義や実習さらに管理運営などに関わる会議などにより参加が難しいという先生方がいらっしゃることも承知している。幸い本日の理事会においては、数名の先生を除いて参加してもらえた。事前に議題等に目を通してもらっていると思うが、さほど深刻な議題はない。この後、評議員会が 14:00 から、16:00 からは市民公開講座が予定されている。難しい議題は基本的に継続審議ということにしたい(次回の理事会であらためて取り上げて意見交換を行い審議する)。円滑な議事進行に協力願いたい。3 月下旬は東日本では降雪があり悪天候であったことから、この時期(4 月下旬)の開催は正解であったと思う。参加者数が気になるところだが、理事会を代表して開催にこぎつけた山口総会長に感謝する。

II. 確認事項

前回理事会の議事録案について：赤池理事長より以下の説明があった。事前に配布しているので確認しているかと思うが、本日の審議終了までに修正などあれば知らせてほしい。*修正等はなく、議事録は確定した。

III. 総会報告

- 1) 第 9 2 回総会準備状況報告（山口博之 第 9 2 回総会長）：第 9 2 回山口総会長より資料に基づき以下の報告があった。今回の開催にあたり、協力に感謝する。資料に基づき現状を報告する。3/19 時点のものだが、事前参加者数が正会員 377 名、学生会員 102 名、留学生 16 名、非会員 28 名、合計 523 名(有料会員)。正会員数だけを見ると、第 89 回総会(大阪)に比べると-198 名、第 90 回総会(仙台)に比べると-164 名、第 91 回総会(博多)に比べると-84 名。よって現在予算を緊縮している。第 92 回の総予算が約 2700 万円であったが、今回は 2100 万円程度(-600 万円)になっている(博多の総会では日韓シンポジウムがあったが、その予算額 150 万円を差し引いても 400 万円程度の緊縮財政となっている)。寄付金だが、第 91 回総会では 900 万円程度であったが、今回は 850 万円程度と遜色はない。現在、予想される参加者数を 710 名程度と設定している。現在の有料合計が 523 名なので 187 名の参加上積みがあれば若干だが黒字になる予定である。前回の理事会で、選抜 WS(最優秀賞 1 名と優秀賞 2 名、計 3 名を選抜)の審査基準とデジポス発表から選抜 WS への再選抜(各デジポスゾーンより 2 名を再選抜、計 6 名)するための審査基準について審議してもらったが、審査基準が煩雑(審査項目が多すぎる)、といった意見があった。それを踏まえ修正した審査基準を資料としてつけた。事前メール審議で異論がでなかったため、このような審査基準にて審査をすることにする。選抜 WS の審査では、シンポジウム企画調整委員会の先生方に面倒をかけることになるが、よろしく願いたい。前回の理事会でも話をしたが、若手懇親会を主催するメンバーから総会の公認をもらいたいといった提案があった。前回の理事会では、若手メンバーから提案書を提出して欲しい、といった意見がだされた。意見書が 4/20 に届いたので席上配布した。今回の総会限定ということで、懇親会を公認(総会 HP 上へのバナーリンク、総会長の懇親会への出席)とすることにした。今後の総会での若手懇親会の取り扱いについては、その都度、若手メンバーが理事会を通して総会長に伺いを立てるので、ぜひ検討し総会長の都合に合わせて決定して欲しい。また若手懇親会の扱いについて何らかの取り決めが必要であれば理事会で審議して欲しい。

- 2) 第93回総会準備状況報告(荒川宜親 第93回総会長): 第93回荒川総会長より資料に基づき以下の報告があった。日程は、例年の3月末ではなく2020年2月19日(水)から21日(金)にかけて、名古屋駅前の愛知県産業労働センター「ウインクあいち」で開催する(名古屋駅から徒歩5分*駅から地下道で繋がっている)。メイン会場は800名収容可能。300-400名程度を収容可能な会場が複数ある。会場周囲には、多数の宿泊施設がある。ポスター会場では軽食の用意や、ドリンクコーナーも設ける。参加者の情報交換の場を充実させる。内容は細菌学に関わる最先端の情報を共有してもらえるようなものにした。最先端の成果を、業務で病原体を扱っている者(検査技師など)にも共有してもらえるような企画も設ける。幅広いジャンルの研究内容を共有できるように、シンポジウム企画調整委員会と調整を進めたい。関連学会とのジョイント企画も取り入れる予定である。会費は、多くの方に参加してもらいたいため、できれば正会員で10,000円(あるいはそれ以下)、主たる収入がない大学院生(学生)は、より安くするか無料としたい。テーマは「Postantibiotic Eraと細菌学」とした。北里柴三郎先生から始まった当初の細菌学会は、新たな病原体の探索や診断法の開発からスタートしているので、各病原体の最新情報を盛り込んだ企画を維持したい。臨床や検査の現場で活躍する様々なジャンルの人が参加して有用な知識が得られるような企画にしていければと思う。特に、国際的には抗菌薬が効かない病原体の蔓延(拡散)が大きな問題となっている。薬剤耐性ということも企画に盛り込みたい。配布するポスターの中にもキーワードとして「Postantibiotic Eraと細菌学」(副題として「Medical dark ageへの挑戦」)を掲載した。

IV. 報告事項

1) 総務部会報告

①総務・渉外担当報告(河村理事): 河村理事より資料に基づき以下の報告があった。前回の理事会で基本的には承認してもらった賛助会員の申し合わせ案について、名称をA-Cではなく、よりしっかりしたものにすべきとの意見を踏まえ、賛助会員A(団体)を団体賛助会員(本学会の趣旨に賛同し、その事業を援助するため所定の会費を納入した団体)、賛助会員Bを教育賛助会員[本学会の趣旨に賛同し細菌学に関心を持つ初等中等教育機関等(幼稚園から高等学校)に所属する者で、所定の会費を納入した者]、賛助会員Cをジュニア賛助会員(本学会の趣旨に賛同し細菌学に関心を持つ18歳未満の者で、所定の会費を納入した者)とした。本申し合わせの改定については、理事会の議を経て評議員会で承認を得る、ということにする。

会員の現状報告だが、2019年3月31日現在、名誉会員は34名(-4)、正会員数は1,689名(+6)、学生会員は516名(+4)、賛助会員は31社(-1)、計2,205名。2018年と比べると6名の増となっているが、長期スパンで見ると会員数の減少に歯止めがかかっていない。賛助会員として、高校の先生やジュニア会員が増えることを期待したい。

東京大学微生物科イノベーション連携研究機構より、微生物ウィーク2019への協賛依頼があった。協賛を引き受けた場合には、日本細菌学会の名前が載るとのことと講演依頼があれば引き受けることになる。労務提供や経費負担はないということで、協賛を引き受けたことにした。

②選挙関連担当報告(川原理事): 特になし。

2) 財務部会報告

①会費・会計担当報告(河村理事): 特になし。

3) 広報部会報告

①広報・メディア分野担当報告(河村理事): 河村理事より以下の報告があった。今回の総会に合わせプレスリリースを行っている。一社でも二社でも来てもらえればと思っている。

②HP・SNS分野担当報告(中川理事): 特になし。赤池理事長以下の発言があった。日本細菌学会理事会としては、活動趣旨(目標)として、「顔の見える学会」を目指し、広報活動、関連学会との連携強化、産官学の連携活動強化を通して具体的な実績に結び付けていきたい。各理事には協力をお願いする。

4) 産官学連携部会報告

①産官学連携分野担当報告(菊池理事): 菊池理事より以下の報告があった。ある企業から1,000万円の寄付の申し出があった。どのように運用していくかを審議事項で諮りたい。

5) 学術部会

①学術支援・評価担当報告(長宗理事): 長宗理事より以下の報告があった。今年も昨年同様に、ポスター優秀発表賞の審査を実施する。123演題が対象であり、4グループに分かれて4/23、4/24に審査を実施する。

②学術企画分野

1. シンポジウム等企画担当報告（長宗理事）：長宗理事より以下の報告があった。例年通り次年度総会の企画調整を開始する。次年度総会も企画総数(枠)と総会長企画を荒川総会長に決めてもらい、それを踏まえて審議を開始する。6月には本格的に始動する必要がある。枠が幾つあるのかが専決事項である。本年度は山口総会長からの企画で、選抜WSの審査で協力することになっている。デジボスからの再選抜があるが(6演題)、北海道支部会会員が審査を行い、総会長が再選抜者を決定することになっている。
2. バイオセーフティー担当報告（大西理事）：大西理事より以下の報告があった。病原体等安全取扱・管理指針の改定作業を進めている。全体で6章だてになっているが、残っていた第5章の原稿が おそらく今週中に届く予定である。BSLレベルの確認作業を夏頃までには終わらせたい。HPへのPDFファイル掲載ではなく、冊子体の発行のみとする。
3. ICD 制度協議会等担当報告（菊池理事）：菊池理事より以下の報告があった。前回理事会で説明したが、ICD 資格申請条件が改定された(内容はICD 制度協議会とHPにもアップされている)。問題になっていた臨床実務経験を必須条件にすることは、改定案では少し緩くなっている(厳しすぎる条件は課せないということで緩和された)。更新時のICD 講習会受講回数が2回から3回に増えた。本総会では4/25の16:00からICD 講習会が開催される。

③ 学術交流分野

1. 日本微生物学連盟／日本学術会議担当報告（川原理事/中川理事）：川原理事より資料に基づき 第23回日本微生物学連盟理事会(2018.9/14, 14:00-16:00)の報告があった。IUMSの分科会に関して、中川理事から詳しい説明があると思うが、アメリカ微生物学会が手を引いたことで、予算状況が難しくなっている。日本微生物学連盟共催・講演学術集会、共催シンポジウムおよびフォーラムだが、分野を超えて日生物関連で連携していこうとするものである。連盟から補助金が出る 場合には共催、補助がない場合には後援ということになる。フォーラムは、一般市民を対象とした分かりやすい講演会のこと。今までは東大の駒場キャンパスで行ってきたが、(柳理事長の考えもあり)東京以外での開催について検討中である。前回の理事会での審議を踏まえ、シンポジウムを 計画中であることを説明した。微生物生態学会の木暮先生から説明があったが、連盟のHPをより 活用してもらえるように工夫を施し(高校生や高校などの教育者向けのコンテンツを利用できるようにする)、改修中である。連盟に加盟している学会のHPの内容や教育コンテンツ(菌の画像)を利用したいといった協力要請があった。日本微生物学連盟で賞が設置された。45歳以下の研究者に奨励賞として授与する。分野が広いので3つ程度のカテゴリーに分けて年間3名程度とする予定(原則自薦)。9月の微生物連盟の理事会で承認して開始する。加盟学術団体の紹介ということで、日本ウイルス学会と日本醸造学会からのプレゼンがあった。次回は日本細菌学会(川原理事)がプレゼンをする。基本的にはHPの内容で紹介する予定。日本微生物学連盟講演依頼についての説明があった(東京大学微生物科学イノベーション連携研究機構「微生物ウィーク」2019.7/22-27、第7回アジア植物病理学会 2020.9/15-18、アジア菌学会 2019.10/1-4)。また分科会委員の旅費が年1回しか支出できないことがわかり、旅費の扱いについて今後検討することになった。

引き続き、中川理事よりIUMSの理事会について以下の報告があった。昨年9月に韓国で、今年3月にイタリアで開催された。ほとんどの内容は来年2021年に韓国で開催されるIUMS総会に関連する準備状況と説明だった。一番問題になったのは、IUMSの本体が予算不足になっている(去年の9月の段階で後5年しか持たないといった話があった)。IUMSは各国のIUMSに所属している団体の人数によって負担金を相互に負担することになっている。日本は、日本微生物学連盟を母体として、加盟学会の会員数は9,000人程度なので、それ相応の負担金を拠出している(ヨーロッパの国では数百人程度)。政権が変わってアメリカは学会運営に縛りがあり、ASMからIUMSに全くコンタクトがない状況である。来年の韓国ペジョンの理事会の際に、負担金が見直され、これまで以上に日本への負担金が増す可能性がある。今後、日本微生物学連盟としてどのようにするのかを議論する、と提言をした。

2. 日本医学会連合担当報告（菊池理事）：菊池理事より資料に基づき以下の報告があった。希望があれば学会のポスターを出展できるとのことだったので、広報活動の一環として学会の取り組みをまとめたポスターを作成し出展することにした。
3. 予防接種推進専門協議会担当報告（菊池理事）：菊池理事より以下の報告があった。風疹の予防

接種の追加接種(1962-1979 に生まれ)が 4 月 1 日に施行される。肺炎球菌の定期接種は、100 歳以上にも適応を拡大。

6) 教育部会報告

①次世代教育・人材育成担当報告(松下理事): 松下理事より以下の報告があった。昨年度の無料出張講演だが、予算決算額は 15 万円。千葉大学野田先生の実施状況は、22 校、受講生 2,033 名。細菌学若手コロッセウム支援だが、「細菌学若手コロッセウム in OKAYAMA 2018」に対して予算 30 万円を計上していたが、台風の直撃を受けて開催を見合わせた。そのため全額(理事会の承認済み)を返金済み。しかしながら抄録等、事前準備は行われていたので、今回の細菌学会総会でのシンポジウム企画ならびに非会員参加者への優遇措置は、山口総会長より、予定どおり継続する意向が示され、総会 2 日目に冠シンポジウムを開催することになっている。なお寄付金等の残金は全て、次の会に送金した。今回は東北大学の南澤先生と永田先生(世話人)により、蔵王(8/18-20)で開催することになっている。参加者は 60 名を予定。

日本細菌学会で作成した教育資源である「ミクロの世界からのメッセージ」の再利用に関して、事務局から著作権者(JAMSTEC/宇宙航空開発機構/磯貝先生)に問い合わせを行い、若干の修正(JAMSTEC からの写真の説明が間違っていたので修正)があったものの、基本的には再利用の許諾が得られた。審議事項かと思うが、冊子体は pdf とし Web からダウンロードする形式にできればと考えている。そのために若干の予算措置が必要かと思うので審議事項(その他)で審議したい。

②教育資源発掘・保存担当(松下理事): 上記に含む。

7) 出版部会報告

①学会誌担当報告(大西理事): 特になし。

②M I 誌担当報告(寺尾理事): 寺尾理事より資料に基づき以下の報告があった。3 月 11 日に細菌学会、免疫学会、ウイルス学会の編集長とワイリー担当でミーティングを行った。まずインパクトファクターの見直しだが(2019 年の 6 月末に公表されるが)、現時点で 2018 年の論文数と引用回数が確定しているため、1.4 以上(実際は 1.442)になる見込み[1.7(2016)、1.33(2018)]。編集分析だが、2019 年の 1-2 月の論文投稿数は、細菌学は前年度および前々年度に比べ遜色がない(2019 年 1 月時点で細菌学が 15 編)。引用回数を増やすためにも、インバイットレビューを増やす必要があるが、その投稿数は継続的に一定数を確保できている。掲載された論文数だが、今年度 2 月の時点で proof が追いつかず、3・4 合併号とすることになっている。投稿論文のステータス状況だが、今年度 1-2 月の時点ではかなりの論文が査読中となっている。2018 年についてだが、昨年のインパクトファクターが 1.33 と(落ち込んだと)、6 月の末に公表された。その後、靦面に 8-11 月と論文投稿数が減る傾向にあった(10-15 本/月)。さらに採択数も減少した。残念な話だが、インパクトファクターが下がると、投稿数が下がり採択数が落ち込む(質の高い投稿論文の数が減少)。昨年秋頃から会員に論文投稿をお願いしたところ、現時点の論文投稿数は 3 月の時点で 21 本と、過去に比べて高くなっている(今年に入り 20 本以上/月)。今年(1-2 月)の査読のスピード(First Decision)だが、細菌学が 12 日。Final Decision までの日数だが、査読に回すことなく編集長レベルで アクセプトをだせるようになったので早まった。アクセプトまでの日数は 26 日となっている。前年度および前々年度に比べ早いスピードで査読/Decision が完了できるようになっている。インパクトファクターの向上に向けた取り組みだが、細菌学 3 件、ウイルス学 3 件、レビュー執筆中のものがある。オープンアクセスの論文についてだが(前回の理事会の宿題)、オープンアクセスを行うことで、被引用回数がどれだけ上がるかということ、ワイリーに集計してもらった。MI 誌については、計算上、1.4 以上が確定しているが、オープンアクセスだけに抜粋し直すと約 4 割となり、1.52 となった。JCM(4,000 アーティクル)について調べると、サイテーションが 1.5 倍に上がった。JB(1,700 アーティクル)は、オープンアクセスに限るとインパクトファクターが 3 倍上がった。I&I(1,800 アーティクル)は 1.0 倍であった。ワイリーに費用負担してもらい、我々のジャーナルでレビュー総説については、無料でオープンアクセス化をしよう方向で調整を進めている。2 月号で掲載された 2 つのレビュー論文だが、どちらもオープンアクセスとしている。電子投稿システムの改修だが、非常に簡素な改定の場合に 4 月以降、査読者に回すことなく AE レベルで受理が出来るようになった。MI に投稿するメリットについて、細菌学会 HP に掲載しているのでぜひ確認してほしい(投稿・掲載料は無料(ページ超過とカラーページのみ料金が必要)/細菌学会員は、全巻に無料アクセス/細菌学会員は、オープンアクセス料が 20%off/査読スピードが速い)。バーチャル特集号を昨年トライアルで実施したが、残念ながらアクセス数が少なかった。現在、冊子体での刊行ができないかということで、準備を進めている。ワイリーから会員向けに投稿の呼びかけを英語メールで送っているが、近頃問題になっているハゲタカジャーナルからのメールとして迷惑メールフォルダに入っていることが多いのでは、といった意見を挙げた。MI 誌については、日本語で各会員に投稿の呼びかけを行ってもらえるようになった。3 学会の編集委員長間で議

論に上がったことだが、過去の論文の中で、引用回数ベスト 10 のものを公表している。残念ながらインパクトファクターに関係する直近のものがない(一番新しいもので 4 年前)。そこで直近 2 年でのジャーナルにアークルが掲載(引用)されているのか、そのリストを学会 HP や学会誌抄録号に掲載できればありがたい。直近 2 年で被引用数が非常に高く、MI 誌のインパクトファクター向上に貢献した論文を掲載できればと考えている。これら 2 点については理事会の意見を伺いたい。赤池理事長より以下の追加発言があった。HP と学会誌両方に掲載するという方向で検討してもらい、次回の理事会で審議したい。

③用語集担当報告(富田理事): 特になし。

8) 国際交流部会報告

①IUMS 等担当報告(中川理事): 上記で既に述べた。

②日韓微生物等担当報告(小松澤理事): 小松澤理事より以下の報告があった。前回の理事会で話したが、韓国側から具体的な反応はいまのところない。IUMS の状況と連動するのではないかと中川理事と話をしたが、いまのところそのような話はない。情報収集を行い、次回の理事会であらためて報告する。

9) 社会交流部会

①研究倫理・安全保障分野担当報告(赤池理事長): 特になし。

②利益相反担当報告(中根理事): 特になし。

10) その他:

荒川総会長から以下の追加発言があった。日本医学会連合での学会紹介ポスターの細菌学会英語名称だが、「Japanese Society for Bacteriology」、ではなく「Japanese Society of Bacteriology」かと思う。2017 年までは「Japanese Society of Bacteriology」が使用されていた。本学会は発足当初から英語名は、「Japanese Society of Bacteriology」を使用してきたかと思う。いつから、またどのような経緯で of から for に代わったのか。事務局より、会則では for となっていることが述べられた。

V. 審議事項

- 1) 第 94 回総会長について: 松下理事より以下の説明があった。総会長について、中国・四国支部として受けるべきである、という支部の意向を踏まえ、総会長を引き受けることにした。日程は 2021 年 3 月 23 日(火)~3 月 25 日(木)とし、場所は岡山駅の西口を出て徒歩 3 分に位置する岡山コンベンションセンター「ままかりフォーラム」とした(仮押さえ)。赤池理事長より以下の追加発言があった。引き受けていただき感謝する。岡山での開催は 20 年ぶりとなる。地理的な利便性からしても、また岡山大学の実績からしても、総会長を担当してもらうのは順当なことである。予算運用上苦勞をかけるが、本部からは最大限の広報活動を行うので、よろしく願う。
- 2) 各支部の 2019 年支援要請について: 赤池理事長より資料に基づき以下の説明があった。二つの支部(東北支部と中国・四国支部)から昨年同様の支部への支援要請があった。それに伴い昨年度の活動実績等と予算運用状況(執行状況)に関わる詳細な資料の提出があった。二つの支部からのみ要請がきているが、昨年はその実績(執行状況)から 30 万円を支援した。庶務担当理事と検討した結果、年度繰越の予算が、ある程度残っているということで、本年度は支援額を 20 万円とすることにした。審議の結果、異論はなく東北支部と中国・四国支部へ各 20 万円の支援をすることが了承された。
- 3) 小林六造記念賞の推薦候補者について: 小林六造記念賞の該当者が 2 年間いないことについて、意見交換を行った。
- 4) 日本微生物学連盟シンポジウム案について: 寺尾理事より資料に基づき以下の説明があった。前々回理事会で赤池理事長から要請のあった、微生物連盟の共同シンポジウム案についてまとめた。開催時期は、荒川総会長が開催する来年の名古屋の会期中に細菌学会の主催という形で関連学会(ウイルス学会、生体防御学会、感染症学会)と併せて行うべく準備を進めている。関連学会から演者を 1 名ずつとし、1 人 30 分程度の講演で 2 時間半程度のセッションを組む予定である。演者としては、各学会の新進気鋭の若手あるいは中堅どころということで検討を進めている。参加費や旅費に関してだが、連盟が共催となるか後援になるかによって変わってくるので、検討が必要である。寺尾理事が企画調整を進めるとともに、シンポジウム企画調整委員会で枠を確保することになった。一方、予算措置をどのようにするのかについては未定。
- 5) 2020 年東京五輪への対応について: 赤池理事長より以下の説明があった。ある企業から東京オリンピック・パラリンピック開催にあたり、衛生管理の強化に向けて一般市民への啓発活動をして欲しいといった趣旨で、1,000 万円の寄付を用意している旨の申し入れがあった(産官学連携のメンバーからの提案)。日本細菌学会の正式な活動成果として取り上げるべきものだろうということで、先方と菊池理事を窓口として話(どういう形で協力ができるの

か)を進めている。日本細菌学会ができることとなると、やはり一般市民に対して食中毒のアウトブレイクのリスクがあるので、開催前後に国民の意識と知識を高めて備えを万全にすることである。歴史的に見てもオリンピックで食中毒が発生した事例がある。申し出があった会社は、受託で細菌の分離を行っている会社である。その対象とした飲食店関係の方々(栄養士学会)と交流がある。一般市民以外では、栄養士を対象としたセミナーの開催に関する提案を受けている。ただそれだけで1,000万円となると予算が潤沢にありすぎることになるので、現実的に我々として、どのような協力ができるのかを詰めていきたい。来年、荒川総会長に開催してもらおう総会の中で、そのようなテーマを取り上げてもらえればと考えている(その部分の予算は寄付金で賄えるかもしれない)。菊池理事より以下の追加説明があった。ちょうど今年4/1から外国人労働者の受け入れの法律が変わって、今後、海外労働者が急速に増えると予想されている。また東京五輪の時にも多くの観光客が押し寄せると考えられる。食中毒もそうだが、色々な耐性菌等、日本であまり出ていないようなものが今後急速に増える可能性がある。そういうものの予防啓発活動にどのように細菌学会が寄与できるか、ということで企画を考えるのが良いと考えている。東京都の保健福祉課に連絡をして話を聞いてもらった。都としてもどのような企画ができるのか検討することになっている。その後、都と細菌学会で話し合いの場を設け、詰めていくことになっている。まだ具体的にどのような形になるかは見えていないが、額が大さいので、産学官連携委員会でシンポジウム企画調整委員会と連携し有用な企画をだしていきたい。審議の結果、この方向性について了承された。

- 6) 評議員会および会務総会の報告者の確認について：資料に基づき評議員会と会務総会の段取りを確認した。
- 7) 次回理事会開催日について：2019.11.29(金)

VI. その他

●評議員会について（本理事会直後の実施）：

日 時 = 2019年4月22日(月) 14:00~16:00

会 場 = 札幌コンベンションセンター1階 中ホール

●会務総会：日 時 = 2019年4月24日(水) 13:00~14:10

会 場 = 札幌コンベンションセンター特別会議場

VII. 閉会